

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：創造シリーズ

創造についての教えは諸宗教の出会いの道

創造に関する真理はキリスト教信仰の対象であり、内容です。創造については啓示による以外に明示されているところはありません。聖書と関係のない神話が、宇宙開闢についてあいまいに物語っているだけであって、プラトンやアリストテレスのような大哲学者も、完全な存在として絶対者としての神について高度な考えをもっていたにも拘わらず、創造については考え至ることができなかったのです。（啓示の）助けを借りずとも人間の知性は、この世界と偶有的な存在（つまり必然的に存在しないもの）が絶対者に依存するという真理を知ることができます。しかし、このような依存関係が〈創造〉による依存関係であると言い得るのは、神の啓示によらなければなりません。それゆえ、創造は信仰の真理であるというのです。

創造については、信仰宣言の冒頭の部分で宣言されています。この事実は使徒信経のように古いものの場合も同じです。「私は天地の創造主を信じます。」ニケア・コンスタンチノーブル信経も同様です。「われは信ず、…天と地、見ゆるもの見えざるもの、全ての造り主を。」もう一つ、パウロ六世の「神の民のクレド」から引用しておきましょう。「われわれは、自分の過ぎ行く生活が行われる所であるこの世界のような見えるものと、天使とも呼ばれている純粋な霊のような見えないものとを創造し、各人間の中に霊的で不死な魂を創造された唯一の神を信じる。」

天地と人間の創造に関する真理はキリスト教信経の根本ですが、それはその内容の豊かさによります。世界は神の創造のみわざの結果であると世界の起源に言及するだけでなく、神が創造主であることも啓示しているからです。神は預言者を通じて、また終りの日々には御子を通じて語られ（ヘブライ1・1参照）、啓示を受け入れる人々に、御自分が世界をお造りになったことだけでなく、創造主であるとはどういうことかをもお示しになりました。

事実、新旧両約聖書には、創造と創造主である神について数多くの真理が記されており、聖書の最初にくる創世の書は創造に関する真理から始まっています。「神は天と地をつくられた、それが始まりであった。」（創世1・1）聖書の他の書を見ても、同じことが繰返しくりかえし出てきます。というわけで創造は、イスラエルの信仰の中に完全に浸透していたことがわかります。二、三の箇所を思い出しておきましょう。まず詩篇から「地とそこにあるもの、世とそこに住むもの、すべて主のもの。主は地の基を水の上に置いた。」（詩篇24・1～2）「天はあなたのもの、地もあなたのもの、世とそこにあるもの、それはあなたに立てられた。」（同89・12）「海は彼のもので主がそれをつくられ、陸もその御手につくられた。」（同95・5）「主の慈しみは地に満ちる。天は主のお言葉によって…つくられた。主が仰せられれば物は存在し、主が命じられればことはできあがる。」（同33・5～6、9）「主の祝福を受けよ、天地をつくられた主の祝福を。」（同15b・15）知恵の書では、同じ真理を次のように述べています。「父祖の神よ、あわれみの主よ、そ

のみことばで宇宙を…つくられたお方よ。」（知恵9・1） また預言者イザヤは、一人称を用いて創造主である神のお言葉を伝えています。「私はすべてをつくった主である」（イザヤ44・24）と。

新約聖書でもこの点をはっきりしており、例えば、ヨハネ福音書の冒頭は次の通りです。「はじめにみことばがあった。…万物はみことばによって造られた。造られた物のうちに、一つとしてみことばによらずに造られた物はない。」（ヨハネ1・1、3） ヘブライ人への書簡では「信仰によって私たちは、万物が神のおことばによって造られ、見えるものには見えない原因があることを理解する」（ヘブライ11・3）とっています。

創造に関する真理によると、神の外にあるものは全て（神以外は全て）、神に呼ばれて存在するに至った、ということになります。聖書にはこの点を明確に述べる章句があります。マカバイ書に出てくる七人の子をもつ母親の言葉です。死の危険が迫ってきた時、末の子に話しかけます。「天地にあるすべての物をよく見ておくれ。神はそれらのものを、前からあった何かの物から造られたのではない。人間はそのようにして造られた。」（マカバイ下7・28） ローマ人への書簡を見ると「神は、死者を生かし、存在しないものを存在させられると、アブラハムは信じた」とあります。

このように「創造」とは〈無から作ること、存在へと呼び出すこと、つまり無から存在を作り出すこと〉なのです。聖書の言葉遣いからもそれは明らかです。「神は天と地をつくられた、それが始まりであった。」〈造った〉というのはヘブライ語で「バラ」と発音する語の訳であり、神のみが主体となり得るような特異な行為を示します。流浪の生活のあとでは、はじめに神の介入があったという事実はさらに正確に理解され、マカバイの第二の書になると、神はそれらのものを、前からあった何かの物からではなく造られた、と記されています。さらに一層意味を明確にして、教会の教父と神学者たちは〈無からの創造〉と表現しました。（*creatio ex nihilo* もっと正確には *ex nihilo sui et subiecti*）

創造において、神は新しい存在の唯一にして直接の源です。つまり、（神の創造以前から）存在するものを認めません。

創造主である神はある意味で被造物のそとに在し、被造物は神のそとに存在する。それと同時に、被造物は全く完全にその存在を神に負っています。被造物はまったく完全に神の御力を源としているからです。

神はその創造の力（全能の力）によって〈被造物のうち〉にあり、被造物は〈神のうちにある〉とも言えましょう。ところで、神が遍在なさることは確かですが、それによって全てに存在をお与えになるという意味での神の超越性が弱められることにはなりません。

聖パウロがアテネのアレオパゴに足を踏み入れた時、集まった人々に次のように話しました。「私がこの町を歩いて、あなたたちの礼拝するものを見ていますと〈知られざる神に〉と記した一つの祭壇を見つけました。あなたたちが知らずに礼拝しているものを私は知らせましょう。この世とそこにある全てをつくられた神は天地の主であります。」（使徒行録17・23～24）

アテネの人々が、異教の多神教信奉者でありながら、唯一の神、創造主について耳にしても何ら反論しなかったという事実は注目に値します。すなわち、創造に関する真理は、

異なる宗教を信じる人々の間にあって、出会いの道であるということです。創造についての真理は、聖書に記されてあるほどはっきりしてはいないながら、種々の宗教が根本的な事柄として内に秘めているからかもしれません。

創造とは、世界と人間とを無から存在へと呼び出すこと

神は、御自分以外の全て、つまり世界と人間を、無からお造りになった。このことはすでに聖書の第一頁に記されています。（ただし、創造についての詳しい説はのちに啓示が発展した段階で現われる。）

創世の書の始めを読むと、創造に関する二つの記述に気づきます。聖書学者の判断に従えば、第二の記述の方が古いようです。表象的具体的な性格をもつこの記述の中で、神は〈ヤーウエ〉と称されています。そこでこの第二の記述を〈ヤーウエ〉伝承と称します。

第二よりも後に書かれた第一の記述は、第二の記述よりも一層系統的、神学的です。第一の記述では神のことを〈エロヒム〉と称しており、その中で神の創造のみわぎは六日間の活動としてあらわれます。そして七日目を神が休息をお取りになる日としています。それゆえ、神学者たちはこのテキストが「司祭・礼拝のサークル」から生まれたと結論しました。創造主である神の例を示して、働く人々がその模範に従うよう勧める創世の書第一章の著者は、十戒の掟である七日目の安息日を守るべきことが確認されるようにと、手をまわしたわけです。

創造に関する記述は典礼の内外で頻繁に読まれかつ黙想されるべきでしょう。一日ごとの神の御働き相互の間にある厳密な継続性と類比の言葉は、「神は天と地を造られた」です。すなわち、目に見えるものすべてをお造りになったということ。ついで日毎のみわぎを記述するとき必ず、「神が仰せられた…あれ」という表現があらわれます。創造主の〈フィアト（在れ）〉という言葉の力を受けて徐々に、見える世界が生まれてくるのです。初め、地は「整わず、むなしかった。」そののち神の創造の働きのもとに地は少しずつ生命に適したものとなり、植物、動物など生命のあるものが、そしてついに神はそれらの中に「ご自分にかたどって」人間をお造りになりました。

このテキストは宗教的にも神学的にもすこぶる重要です。自然科学にとって意味ある要素をここに求めようとしても無駄なこと。この記述のなかに、各々の種の起源や進化（発展）に関する決定的な規則や積極的に研究に貢献するような事柄を求めても無駄でしょう。自然進化説は神が原因であることを除外しない限り、原則としては、創世の書による目に見える世界の創造に関する真理と対立するものではありません。

全体としてみれば、靈感をうけた聖書記者は、当時の天地発生についての考え方を取り入れて叙述しています。ただし、その記述の中で、全ては唯一の神のわざから成ったことを全く独創的に記しており、これが啓示された真理であるわけです。ところで、聖書のテキストは、一方では目に見える世界が徹底的に神に依存すること、そして神が個々の被造物すべてに対して力を持つことを主張するとともに、他方、神の御前で全ての被造物が有する価値をも浮き彫りにして見せてくれます。事実、一日の創造の後に、「神はよしと思われた」と書いてあり、六日目の創造の後では「神は、ご自分のつくりだされたすべての

ものをながめわたされた。これをよしとして満足された」と書かれています。（創世1・31）
宇宙の中心である人間を造られた後のことです。

創造に関する聖書の記述は存在論的である、つまり、有について述べるとともに、価値論的だ。造られたものの値打ちについても述べているからです。神は無限の善性の現われとして、全てを善きものとして造られた。これが聖書による宇宙発生、とりわけ創世の書の序論から引き出せる根本的な教えです。

創世の書、および聖書の他の箇所でも、創造のわざと創造主である神について述べるところを見ると、幾つかの点が明らかになります。

- [1] 神はご自分一人で世界を造られた。創造の力は他者に与えることはできない。
- [2] 外的な強制からでも、内的な必然性（義務）からでもなく、神は自由に世界を造られた。神は創造することもしないこともできたし、今のような世界を造ることも、それとは異なる世界を造ることも可能であった。
- [3] 世界は、神によって時間の内に造られた。従って、世界は永遠ではなく、時の内に始まりを有する。
- [4] 神に造られた世界は、創造主によって絶えず存在を支えられている（保存）。この保存は創造の継続であるといえる。

二千年足らずのあいだ教会は、旧約の神の民イスラエルの信仰を受け継いで、目に見える世界と見えない世界は神の創造によるという真理を一貫して告白し、かつ宣言してきました。教会はこの真理を説明するにあたり、「存在の哲学」を用いています。また教会は、思想上ときどき現れる歪曲（こじつけ）からも、この真理を守ってきました。第一バチカン公会議において教会の教導職は、当時の汎神論や唯物論の傾向に対抗し、特に荘厳にそして力を込めて、世界は神の創造の御働きによると確認したのです。汎神論や唯物論的な傾向は、今世紀においても精密科学と無神論的なイデオロギーの中に生きています。第一バチカン公会議の『デイ・フィリウス』を読んでみましょう。「この唯一のまことの神は、自分の幸福を増し、または獲得するためにではなく、被造物に与える善によって、自分の善と『全能の力』とによって、自由な計画をもって『時間の始めから霊的被造物と物質的被造物、すなわち天上と地上との被造物をひとしく無から創造し、次にこの両者を合わせた霊魂と肉身とから成り立っている人間を創造した。』（第四ラテラノ公会議）」（『カトリック教会文書資料集』 DS 3002）

教義を述べるテキストの後にくる〈カノン〉の中で、第一バチカン公会議は次の真理を確認しています。（同 DS 3021～3025）

- [1] 「見えるものと見えないもの」の創造者であり主である真の唯一の神。
- [2] 物質の他には何も存在しないと主張（物質主義）して恥じない者は排斥される。
- [3] 神とすべての事物とは、その実体または本質において同一であると言う説（汎神論）は排斥される。
- [4] 物質的ならびに霊的な有限の事物が神の実体から流出したものであるとか、神の実体の表現または進化によってすべての物ができあがるとか言う者は排斥される。
- [5] 神は普遍的すなわち無限のものであり、これを限定することによって類、種、そして

個々の区別が生ずるといふものは排斥される。

[6] 世界とそこにあるすべての物は、靈的なものも物質的なものもすべて、その実体は神によって無から造られたものであることを否定するものは排斥される。

創造のわざの目的については別に扱う必要があるでしょう。実はこちらの方に、啓示においても教会の教導職と神学においても、多くのスペースが費やされています。

話の結びとして、知恵の書の美しい言葉を読みましょう。愛の心から宇宙を造り、それを保存してくださっている神をたたえるこの言葉を。

「あなたは存在するものをすべて愛される、つくられた物を一つとしてきらわれない。あなたが何か憎んでおられたら、それはつくられなかったろう。あなたの望まれぬ物が存在するはずはなく、呼びだされぬ物も存在しない。あなたはすべての物を惜しまれる、すべては、あなたの物なのだから、生命を愛される主よ。」（知恵11・24～26）

※ 訳出してないもの 「創造の神秘」 「創造は三位一体の神のわざ」 「創造は神の栄光の啓示」 「創造と被造物の自律」 「神の似姿である人間」 「靈魂と身体からなる人間」 「人間の知恵と自由」